

# 四季の移ろい



歩こう!文化のみち



二葉館の紅葉



「屏風ga語ru」～画家・柳瀬辰久・心～

## 文化の追みち その六の 追遙

### 【名古屋市政資料館】東区白壁



名古屋市政資料館は、大正11年(1922年)に、当時の司法省によって名古屋控訴院・地方裁判所・区裁判所庁舎として建設され、昭和54年(1979年)に名古屋高等裁判所・地方裁判所が現在の新庁舎に移転されるまでの間、約60年間に中部地方の司法の中心として活動し、歴史を深く刻み込んだ現存する最古の控訴院建築です。

この建物は、地域のシンボルとして人々に印象づけられており、名古屋の近代化の歩みを今に伝える歴史的遺産の宝庫「文化のみち」の一角にあつて、都心を間近にしながら落ち着いた安らぎのある景観を持っています。

また、外壁の赤い煉瓦と白い花崗岩、上屋銅板の緑、屋根のスレート黒を組み合わせた華やかさと荘重なネオ・バロック様式を基調と

にした三階建ての建物で、日本の近代建築における大正末期の建築物を忠実に表現しています。このことから、歴史的・文化的にも貴重な遺産として、昭和59年5月に国の重要文化財に指定されています。

名古屋市では、この建物が持っている歴史的特性を踏まえながら文化的に有効に活用できるように、名古屋市政資料館として整備し、保存公開をするとも

に、名古屋市の公文書館として名古屋市の誕生から今日に至るまでの行政文書や資料を保存し、閲覧に供しています。なお、館内には多くの資料や模型でもって建物、市政、司法をテーマとする常設展示を設け、わかりやすく紹介しています。館内を歩きながら名古屋の歴史を学ぶことができます。ご見学される際には、事前にご連絡をいただきますと、館内案内のガイドも行っていきます。また、市民の方が文化活動でご利用いただける集会室や一般展示室(有料/1000円)もあります。

最近では、ドラマなどのロケ地としても活用され、結婚式の前撮りやコスプレなどの様々な撮影にも利用いただいています。土、日、祝日には、中央階段室を利用した人前結婚式を行うこともでき、館全体で祝福し、幸せなカップルが多数誕生しています。

これからも貴重な歴史的遺産を大切に保存し、市民の皆様に喜んでご利用いただけるよう努めてまいります。



#### DATA

**名古屋市政資料館**  
 名古屋市東区白壁一丁目3番地  
 ■開館時間 午前9時～午後5時  
 ■休館日毎週月曜日(祝日の場合は、その直後の平日)、第3木曜日(祝日の場合は第4木曜日)  
 ■入館無料  
 ■TEL 052-953-0051

## 大正モダニズム建築の粋を見る ④

文化のみち二葉館の凹凸のあるモルタル壁は、色の付いたモルタルを竹べらで掃き付けて作る「ドイツ壁」と呼ばれるものです。明治から昭和のはじめに建てられた洋風建築に見られ、壁材料であるリシンをドイツから輸入し、これを用いて仕上げとしたためこのように呼ばれているようです。



2011年10月29日(土)～11月6日(日)まで2階展示室5で開催された「目で見る怪談文学散歩 金井田英津子「文豪怪談傑作選」原画展」では、坪内逍遙作の「神変大菩薩伝」を紹介しました。

あまり知られていない「逍遙と怪談」というアプローチは、逍遙に新たな親近感を抱くことができるのではないのでしょうか。



トークイベント「文豪怪談を描く」  
 版画家・金井田英津子氏、アンソロジスト・東雅夫氏



文豪怪談傑作選原画展

# 逍遙と怪談

日本近代文学の夜明けを告げた作家、坪内逍遙をご存知だろうか。「小説神髓」で、勸善懲惡を主題とした戯作文学を否定し、小説の世界に心理描写に重きをおく写実主義(リアリズム)を導入・実践することで、日本文学史に偉大な足跡を残した文豪の一人である。

この地で怪談を語る上で、逍遙は看過することができない人物である。

彼は幕末の岐阜に生をうけ、長らく名古屋で過ごした経歴をもつ。その作品からは、欧風文化に感化さ

れつつも、彼の否定した戯作文学のもつ怪奇性・幻想性——歌舞伎からの濃い影響や日本の風土色の強いもの——が彼の中に受け継がれていることを見出すことができる。

事実、彼は「御伽草紙」や「玉藻前」などの夢幻の如き世界を下敷きにし、楽劇\*へと昇華させた。とりわけ、役行者に材をとる「神変大菩薩伝」では、登場人物の巧みな心理描写に加え、漢語・外来語を駆使した近代日本の雰囲気そのものをまとう、妖しくドラマティックな作品である。彼自身も「人間離れ、尋

常離れのした新時代の絵巻なり、草双紙が見たい」から書いたと述べ、自ら挿絵を描くほどの力のあるようである。

「尋常離れ」したものと、彼は「地獄草紙」、「餓鬼草紙」、「信貴山絵巻」、「鳥獣戯画」を例に挙げるが、「神変大菩薩伝」にはこれらの世界と地続きであるかの如く感じられる作品である。彼の、土俗的な幻想趣味がこれらの作品を生み出したのだ。

「文豪怪談傑作選 明治篇 夢魔は蠢く」(東雅夫 編)では「神変大菩薩伝」が挿絵付きで収録されている。怪談の奥の深さと同郷の士を知る意味でも是非手に取っていただきたい。透徹した明快さが齎すダイナミックな描写と怪談の親和は逍遙ならでは。

(安部孝作・渋江照彦)

\*楽劇：オペラのような劇

## 倉庫棟から

### 茅ヶ崎訪問

文学ボランティア 稲葉 誠也

東海道線茅ヶ崎駅南口を出ると高層マンションが二棟並立している。左棟の上階が作家城山三郎の仕事場であった。外観を眺めて満足していたら、案内をしてくれた「城山三郎湘南の会」のご好意で、会員の御宅が上階に在るから一度無理を言ってみようと、交渉していただき、了承を得て八人がエレベーターで個人の御宅へどやどやと雪崩れ込んだ。部屋の構成は異なるが、眺望はほぼ同様だということであった。相模湾が遠望でき市街地が眼下に広がり、眺望絶佳である。仕事に疲れたとき、城山さんは大きく深呼吸をして脳を活性化し、ストーリーを構想しただろうと想像した。



茅ヶ崎海岸



茅ヶ崎美術館

玄関を出ると富士山頂が見える。西陽にシルエットを見せる富士を眺めて一日の疲れを癒し、帰路についたのでないだろうか。

十一月六日(土) 茅ヶ崎市美術館で開催されている「川上音二郎・貞奴展」を鑑賞に二葉読書会の五人が出かけた。九月十一日(日)一五名の「湘南の会」の来名に感謝しての訪問である。五名の会員が美術館で迎えてくださり、喫茶室のテーブルを囲んで話し合いを楽しんだ。展示を一時間ほど鑑賞した。展示品は充実していて自館資料も多く、国内資料を個人蔵まで手配し、フランス国立図書館からも多く取り寄せていた。

美術館は「高砂緑地」の高台にあり、外観も美術館らしい佇まいで雰囲気は充分である。音二郎・貞奴の別荘跡の井戸が残されていた。八木重吉などの碑をみて、海岸へ出た。茅ヶ崎の浜は夕日に照り映えていた。城山さん愛用の書店や喫茶店に寄って帰路についた。